

札幌市子どもの安心と救済に関する実態・意識調査

---

報 告 書

2008(平成20)年4月

## 目 次

I 調査の概要.....	1
II 調査結果から見えるもの.....	5
III 調査結果 .....	17
—— 子ども ——.....	19
—— おとな ——.....	63

# I 調査の概要



# I 調査の概要

## 1. 調査目的

本調査は、札幌市の子どもたちの安心や安全をめぐる状況、安心や安全を脅かす状況に対する相談・救済の取組み、さらに子どもを取り巻く環境（家庭・学校・地域等）について調査することで、現状と課題を探り、今後の施策づくりや取組みに資することを目的とした

## 2. 調査方法

### (1) 調査対象

札幌市の住民基本台帳をもとに、子ども（11歳～17歳）5,000人、おとな（18歳以上）5,000人を等間隔抽出法により抽出した。（年齢は、2007〔平成19〕年6月1日現在）

### (2) 調査方法

調査対象者宛に直接調査票を送付し、郵送によって回収する手法をとった。アンケート調査を実施する際、各学校・施設等を通してアンケート調査票を配布・回収する手法がとられることがあるが、今回は、学校や施設等における子どもの実態を尋ねる設問もあることから、調査対象者の「答えやすさ」に配慮して、このような手法を選択した。一般的に、調査対象者へ直接送付する方法は、学校や施設を介してアンケート調査票を配布・回収する方法に比べて、回収率が伸びない傾向にあるが、今回は、以上のような配慮を優先させて調査を実施することとした。

### (3) 調査期間

2007（平成19）年 6月中旬	調査票作成・印刷
2007（平成19）年 7月上旬 ～8月上旬	調査票発送 調査票回収締め切り
2007（平成19）年 9月上旬 ～2008年3月	調査票集計結果速報 調査結果分析
2008（平成20）年 4月	調査報告書作成

### (4) 回収結果

単位：(人)

調査	対象数	回収数	回収率
子ども	5,000	1,313	26.3%
おとな	5,000	1,468	29.4%
合計	10,000	2,781	27.8%

### 3. 調査内容

#### <子ども調査>

- ・回答者の属性
- ・今打ちこんでいること、やりがいを感じる
- ・将来の夢、なりたい職業
- ・疲れること、不安に思うこと
- ・ホッとでき安心していられるところ
- ・自分が話したいことを何でも話せる人
- ・大切に思ってくれていると思う人
- ・自己肯定感の有無
- ・子どもの権利条約の認知度
- ・おとなからの傷つき体験の有無、その時の気持ち、対処法、相談先、改善の程度
- ・友達や先輩からのいじめ・暴力等の経験の有無その時の気持ち、対処法、相談先、改善の程度
- ・誰かのいじめ・暴力を受けている場面を目にした経験、対処法、相談先
- ・札幌市内の相談機関の認知度・利用度
- ・希望する相談機関・救済制度

#### <おとな調査>

- ・回答者の属性
- ・子どもが今打ちこんでいる／やりがいを感じていると思うこと
- ・子どもの将来の夢、なりたい職業
- ・子どもの疲れること、不安に思うこと
- ・子どものホッとでき安心していられるところ
- ・子どもが話したいことを何でも話せる人
- ・子どもが大切に思ってくれていると思う人
- ・子どもの自己肯定感の有無
- ・子どもの権利条約の認知度
- ・子どものおとなからの傷つき体験の有無、
- ・子どもの友だちや先輩からのいじめ・暴力等の経験の有無
- ・おとなの疲れること、不安に思うこと
- ・子ども時代のおとなからの被虐待経験の有無
- ・おとな自身の自己肯定感の有無
- ・札幌市内の相談機関の認知度・利用度
- ・希望する相談機関・救済制度

### 4. 報告結果の見方

(1)小数点は第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合もある。

(2)回答の比率(%)は、その設問の回答者数(n)を基数として算出した。したがって、複数回答の設問は、すべての比率を合計すると、100%を超える。

### 5. 分析方法

分析は、単純集計のほか、子どもにおいては、①子どもの年齢(調査票【子ども】問2) ②子どもの自己肯定感の有無(調査票【子ども】問15)によるクロス集計、おとなにおいては、①子どもの有無(調査票【おとな】問4) ②おとなの自己肯定感の有無(調査票【おとな】問16.)によるクロス集計を行った。調査結果の分析においては、統計的に有意差のあるものについて触れている。

## Ⅱ 「札幌市子どもの安心と救済に関する 実態・意識調査」結果から見えてくるもの





## Ⅱ 「札幌市子どもの安心と救済に関する実態・意識調査」結果から見えてくるもの

### 1. 学校・家庭等における子どもの生活

調査対象とした子ども（11歳から17歳）のうち、平日学校に通っている子どもは97.2%、それ以外の場所（家、職場等）にいる子どもは合わせて2.6%であった。以下の特徴は、主に平日学校に通っている子どもに関するものである。

#### 【1】子どもと学校

##### （1）「学校の勉強」「クラブ活動・部活動」

学校に通う子どもが1日の生活の中で多くの時間を費やしているのが、「学校の勉強」と「クラブ活動・部活動」である。

まず「クラブ活動・部活動」については、全体で43.6%の子どもが、「今打ちこんでいること、やりがいを感じていること」としてあげ、すべての年齢において高い回答があった。特に12歳67.3%、13歳52.8%で半数を超えた。次に「学校の勉強」については、全体で33.6%の子どもが「今打ちこんでいること、やりがいを感じていること」としてあげた。

一方、「クラブ活動・部活動」「学校の勉強」を「疲れる、不安に思うこと」としてあげる割合を見ると、「クラブ活動・部活動」については、子ども全体の13.1%にとどまったが、「学校の勉強」は、53.0%と半数以上の子どもがあげた。年齢別に見ると、11歳、12歳では50%以下だったが、13歳以降は50%前後があげ、特に13歳で54.5%、15歳で65.6%、16歳で60.6%と高かった。

学校の勉強やクラブ活動・部活動に前向きに取り組み、学校で充実感を得られている子どもが相当数いる一方で、学校の勉強に疲れや不安を感じている子どもが中学生世代以降でとても多いことが懸念される。

【子ども図6-1、6-2、8-1、8-2】

##### （2）子どもと教師の関係

おとなからの傷つき体験として、「先生に心を傷つけられる言葉をいわれる」経験がある子どもは、全体の9.2%、「先生から、たたかれる・なぐられる」経験がある子どもは、全体の1.8%であった。年齢別にみると、「先生から心を傷つけられる言葉をいわれる」経験があると回答する子どもが、14歳で10.8%、17歳で12.5%と他の年齢に比べて高かった。この点についてはより詳細な実態分析と今後の対策が求められよう。

一方で、「何でも話せる人」として、「友だち」（73.0%）「親」（58.5%）「兄弟姉妹」（26.7%）に回答が集まる中、「担任の先生」をあげる子どもが11歳で35.6%、12歳で15.3%、13歳で13.8%（子ども全体では10.7%）あった。また、「自分を大切に思ってくれていると思う人」として、「親」（86.1%）「友だち」（67.2%）「祖父母」（52.0%）「兄弟姉妹」（49.0%）が多いほか、「担任の先生」をあげる回答も、子ども全体の25.5%、特に11歳45.2%、12歳38.8%と高かった。その他「クラブ・部活動の顧問の先生」をあげる回答が、子ども全体の12.2%で、特に12歳20.4%、13歳16.3%であった。特に小学校高学年世代では、教師に対する信頼感が比較的高いことがうかがえる。

「教師との関係」と一括りにいっても、日常的にどのような関係を築けているかによって、教師に信頼感を持てる子どももいれば、持てずにストレスを感じる子どももいる。今回の調査結果からは、先生からの傷つき体験の有無と、先生を「何でも話せる人」と捉えているかどうかの相関関係をさらに詳細に調査することはしていないため、この点については今後の課題である。しかし、少なくとも、子どもの生活の中でも多くの時間を過ごす学校で、子どもと直接顔を合わせる機会が多い教師は、子どもにプラスの影響もマイナスの影響も与えうる、子どもと近い存在であるということではできよう。当然のことながら、子どもからの信頼を得られれば、教師は、子どもが傷つき悩んだときに、それを

近くで察して話を聴くことが可能で、子どもの救済にとって重要な位置にいるといえる。

【子ども図9-1、9-2、13-1、13-2、14-1、14-2】

### （3）友だちとの関係の重要性

「疲れること、不安に思うこと」として、「学校の勉強」や「受験・進路」に次いで多くあげられるのが、「友だちや先輩との関係」で、子ども全体で29.6%、年齢別に見ると、16歳で35.6%、15歳で35.5%と高い回答だった。具体的に、「友だちや先輩などに、心を傷つけられる言葉を言われる」経験がある子どもは、全体の28.3%で、特に13歳から17歳で30%前後と高く、「友だちや先輩などから、無視される」経験がある子どもは、全体の18.4%であった。

一方で、「何でも話せる人」として「友だち」をあげる割合は、子ども全体で73.0%と最も高い回答であり、「自分を大切に思ってくれていると思う人」としても67.2%と高い割合で回答があった。

子どもにとって、日々の生活の中で、友だちの存在はとても大きい。子どもは友だちとの関係で悩むこともあるが、話したいことを何でも話せる存在で、自分の存在価値を感じることでできる友だちは、日常生活を安心して送っていく上で、また何か傷ついたときの救済を考えていく上で、とても重要な存在であることがうかがえる。

【子ども図8-1、8-2、10-1、10-2、13-1、14-1】

### （4）大きなストレスとしての受験・進路

「疲れること、不安に思うこと」として「受験・進路」をあげる子どもが、全体の43.3%と高い割合だった。年齢別に見ると、「疲れること、不安に思うこと」として「受験・進路」をあげる子どもが、特に14歳で59.1%、17歳で55.2%、と50%を上回った（16歳でも45.3%と高い割合）。札幌市の子どもにとって、受験・進路選択の問題が、日常生活の中でかなりのストレスとなっていることがわかる。

【子ども図8-1、8-2】

## 【2】子どもと家庭

### （1）基本的な存在としての親との関係

親との関係を「疲れること、不安に思うこと」と回答する割合は、子ども全体では15.8%、「学校の勉強・宿題」（53.0%）「受験・進路」（43.3%）「友だちや先輩との関係」（29.6%）「学校の規則」（17.2%）に次いで多い回答だった。年齢別に見ると、特に16歳で19.1%、15歳で18.1%と高かった。また、「親に心を傷つけられる言葉をいわれる」経験のある子どもが全体の13.9%、「親からたたかれる・なぐられる」経験については10.6%の子どもがあると回答している。

このように親との関係で身体的・心理的に傷ついた経験のある子どもが一定数いる一方で、「何でも話せる人」として「親」をあげる子どもが全体の58.5%あった。年齢別に見ると、「何でも話せる人」という設問で「親」をあげる回答は、11歳で83.6%と最も高く、それ以外の年齢でも50%を超える子どもが回答している。年齢が上がるにしたがい、その割合が徐々に減少していく傾向が見られる。しかし、「自分を大切に思ってくれていると思う人」を尋ねる設問では、すべての年齢において90%前後の子どもが「親」をあげている（子ども全体では86.1%）。

子どもにとって、親とは、自分を大切に思ってくれているという信頼感を抱ける、基本的な存在であることがうかがえる結果であった。子どもの成長にしたがって、「何でも話せる存在」としての「親」の比重は低くなるものの、子どもの年齢にかかわらず、子どもは、親に対して、自分を大切に思っていてほしいと期待しているともいえよう。

【子ども図8-1、8-2、9-1、13-1、13-2、14-1、14-2】

### （2）家族（祖父母、兄弟姉妹等）との関係

「何でも話せる人」として、「友だち」（73.0%）「親」（58.5%）に次いで多かったのが「兄弟姉妹」

(26.7%)「祖父母」(12.2%)であった。また「自分を大切に思ってくれていると思う人」を尋ねる設問でも、「祖父母」(52.0%)「兄弟姉妹」(49.0%)は高い割合だった。子どもの中で家族の占める割合が高い実態が明らかになった。

子どもにとって、家族も親とともに日常生活の中で大きな位置を占めているといえる。

【子ども図13-1、14-1】

### 【3】子どもと地域

「今打ちこんでいること、やりがいを感じていること」として、「住んでいる地域のスポーツ活動」をあげる回答は、子ども全体では4.3%であったが、11歳で16.4%と高い回答であった。その他、「ボランティア活動」が2.0%、「子ども会活動」は1.2%であった。前述のように、子どもの1日の生活の中で大半を占めるのは学校であり、それ以外にも「塾の勉強」(子ども全体で11.3%。14歳で21.2%、12歳で20.4%)「おけいこ・習いごと」(子ども全体で16.3%。11歳で39.7%、12歳で22.4%、13歳で22.0%)に時間を費やしており、結果的に、地域における活動に関わっている子どもは、全体的にはあまり見られない結果となった。

地域における活動に子どもがあまり参加しない要因は様々に考えられるが、地域が子どもの居場所・活動の場所として十分な環境になっていないことも反映していると思われる。ちなみに、「知らないおとなに声をかけられる・追いかける」経験をしたことがある子どもは9.2%で、特に17歳で16.1%、16歳で11.4%と高かった。地域が子どもの居場所・活動の場所になっていくための施設や環境の整備が求められているといえよう。

【子ども図6-1、6-2、9-1、9-2】

### 【4】子どもの安心していられる場所

子どもが安心していられる場所として、最も多く回答があったのは「自分の部屋」で、85.6%と非常に高い結果であった。次いで多いのが「家族と一緒にくつろぐ部屋」で52.0%であった。どちらも同じ家の中の居場所でありながら、回答の割合には大きな開きがあった。この二つを年齢別に見ると、すべての年齢において、「自分の部屋」をあげる回答が、「家族と一緒にくつろぐ部屋」をあげる回答を上回る。安心していられる場所を、家であると感じている子どもが最も多く、特に家の中でも、子ども自身のプライベートな空間をあげる傾向が強い結果であった。それ以外の場所としては、「学校の教室」(24.5%)「友だちの家」(22.4%)「祖父母の家」(17.0%)が比較的多くあげられた。また昨今、不審者対策等と合わせて語られることが多い「公園」を、安心していられる場所としてあげる回答が13.7%と比較的高かった。

上記にあげられた場所は、「自分の部屋」を除いて、自分以外の他者との関わりがある場所であり、これらの場所で、子どもと関わりを持つことが予想される、家族(親、兄弟姉妹、祖父母)、友だち等に関しては、子どもが「自分を大切に思ってくれていると思う人」として回答する割合が高い(親86.1%、友だち67.2%、祖父母52.0%、兄弟姉妹49.0%)。子どもにとって、安心していられる場所の要素として、子どもが自分を大切に思って受け入れてくれると思う人がいることが考えられる。

【子ども図12-1、12-2、14-1】

## 2. 子どもの自己肯定感の現状とその影響

今回の調査では、子どもの自己肯定感と子どもの生活の充実度等に相関関係があるのではないかと仮定し、自己肯定感の有無の観点から、子どもの生活実態を分析してみた。

自己肯定感の基本的な要素である「自分のことが好きだ」という項目については、「そう思う」と回答する子どもは14.3%、「まあそう思う」38.3%、「そう思わない」と回答する子どもは14.9%であった。「あまりそう思わない」31.5%。

調査の結果、自分のことを肯定的に捉えている子どもと、捉えていない子どもとは、さまざまな活動への取り組み姿勢、日常生活における人間関係、悩んだり傷ついたりしたときの解決方法などに違いがあることが明らかになった。

(以下の分析では、違いをより鮮明にするために、自己を肯定的に捉えている子どもとして「そう思う」と回答した子ども、自己を肯定的に捉えていない子どもとして「そう思わない」と回答した子どものみを対象とした。)

【子ども図15】

## 【1】活動への取り組み姿勢・日常生活における人間関係の違い

今打ちこんでいることや居場所等に関する設問(複数回答)について、自己を肯定的に捉えている子どもと肯定的に捉えていない子どもの回答を比較すると、いくつかの特徴が浮かびあがった。

### (1) 学校等における活動への積極性

自己を肯定的に捉えている子どもが最も多く回答したのが、「学校のクラブ活動・部活動」(肯定的に捉えている子ども 48.4%、肯定的に捉えていない子ども 31.8%)であった。次いで、「学校の勉強」(肯定的に捉えている子ども 43.6%、肯定的に捉えていない子ども 24.1%)、「友だちとの遊びや活動」(肯定的に捉えている子ども 43.1%、肯定的に捉えていない子ども 42.1%)「学校の発表会・文化祭などの文化行事」(肯定的に捉えている子ども 30.3%、肯定的に捉えていない子ども 18.5%)といった学校の諸活動をあげる回答が多かった。また、「おけいこ・習いごと」(肯定的に捉えている子ども 27.7%、肯定的に捉えていない子ども 11.8%)といった学校以外の活動についても、打ちこんでいることとしてあげる回答が多かった。

一方、自己を肯定的に捉えていない子どもが最も多く回答したのが、「友だちとの遊びや活動」(肯定的に捉えている子ども 43.1%、肯定的に捉えていない子ども 42.1%)であった。その他、「学校のクラブ活動・部活動」(肯定的に捉えている子ども 48.4%、肯定的に捉えていない子ども 31.8%)、「学校の勉強」(肯定的に捉えている子ども 43.6%、肯定的に捉えていない子ども 24.1%)は多くあげられたが、自己を肯定的に捉えている子どもの割合と比較すると約15~20ポイント低い。特に「学校の勉強」については、「疲れること、不安に思うこと」として回答する割合が非常に高かった(肯定的に捉えている子ども 40.4%、肯定的に捉えていない子ども 63.6%)。

また、自己を肯定的に捉えている子どもと比較して、自己を肯定的に捉えていない子どもに特徴的だったのは、「パソコンやインターネットなど」(肯定的に捉えている子ども 25.5%、肯定的に捉えていない子ども 32.3%)、「読書」(肯定的に捉えている子ども 26.6%、肯定的に捉えていない子ども 30.3%)「一人でするゲーム」(肯定的に捉えている子ども 14.9%、肯定的に捉えていない子ども 24.1%)のように、主に一人で行うものを多くあげる傾向があったことである。

自己肯定感の高い子どもは、学校で行われる諸活動に積極的な割合が高いが、自己肯定感の低い子どもは、それに比べると割合は低い。しかも自己肯定感の低い子どもは「学校の勉強」にストレスを感じる割合が60%を超える高さであり、一人で行う活動を好む層が比較的多く見受けられた。学校等における活動への積極的に関わっているか否かと、自己肯定感の高低は、何らかの関係があると予想される。

### (2) 子どもが信頼できる人間関係を築ける場所の有無

第一に、安心していられる場所について、自己を肯定的に捉えている子どもは、自己を肯定的に捉えていない子どもに比べて、家族と過ごす場をあげる回答が多かった(「家族と一緒にくつろぐ部屋」:肯定的に捉えている子ども 66.0%、肯定的に捉えていない子ども 29.7%)。また、自己を肯定的に捉えている子どもは、自己を肯定的に捉えていない子どもに比べて、「学校の教室」「学校の体育館・グラウンド」「学校の部室」をあげる回答が多かった(「学校の教室」:肯定的に捉えている子ども 35.6%・肯定的に捉えていない子ども 11.3%、「学校の体育館・グラウンド」:肯定的に捉えてい

る子ども 11.7%・肯定的に捉えていない子ども 3.1%、「学校の部室」：肯定的に捉えている子ども 12.2%・肯定的に捉えていない子ども 6.7%）。身近な家族と過ごす場所や、毎日多くの人と関わりを持つ機会のある学校を、安心していられる場所と感じられているかどうかと、子どもの自己肯定感の高低との間に何らかの関連があることが予想される。

第二に、何でも話せる相手として、自己を肯定的に捉えている子どもは、「親」をあげる回答が 73.4%と高い回答だったが、肯定的に捉えていない子どもは 40.5%と半数以下にとどまった。同様に、「友だち」についても、自己を肯定的に捉えている子どもの方が、肯定的に捉えていない子どもに比べて、回答する割合が高かった（自己を肯定的に捉えている子ども：75.0%、肯定的に捉えていない子ども：62.1%）。「兄弟姉妹」「祖父母」についても同様に、自己を肯定的に捉えている子どもの方が、捉えていない子どもよりも回答する割合が高かった。逆に、「何でも話せる人はいない」をあげる回答は、自己を肯定的に捉えていない子どもが 16.8 ポイント多い 22.1%という高い割合であった（自己を肯定的に捉えている子ども：5.3%、肯定的に捉えていない子ども：22.1%）。親や友だちに何でも話せる関係を築いているか否かと、子どもの自己肯定感の高低との間に何らかの関係があることがうかがえる。

第三に、自分を大切に思ってくれていると思う人として、自己を肯定的に捉えている子どもは、「親」をあげる回答が 94.1%と非常に高い回答だったが、肯定的に捉えていない子どもは、それより 23.8 ポイント低い 70.3%にとどまった。また、「友だち」をあげる回答も同様に、自己を肯定的に捉えている子どもは 74.5%と高い回答だったが、肯定的に捉えていない子どもは、それより 24.8 ポイント低い 49.7%と半数を割り込んだ。「兄弟姉妹」「祖父母」についても同様に、自己を肯定的に捉えている子どもの方が、捉えていない子どもよりも回答する割合が高かった。このような傾向は「担任の先生」についても顕著で、自己を肯定的に捉えている子どもが 41.5%回答するなかで、自己を肯定的に捉えていない子どもは、31.8 ポイント低い 9.7%と 1 割に満たない回答だった。逆に、「大切に思ってくれている人はいないと思う」をあげる回答は、自己を肯定的に捉えていない子どもの方が多く回答していた（自己を肯定的に捉えている子ども：1.6%、肯定的に捉えていない子ども：10.3%）。自分が親、友だち、教師といった、日常生活における身近な人から大切に思われていると実感できているか否かと、自己肯定観の高低が相互に関係していることがうかがえる。

子どもの自己肯定感が、子どもが学校や地域のさまざまな活動に積極的に取り組んでいるか、日常生活の場の多くが信頼できる人間関係を築くことのできる、安心できる場所になりえているか、このような点と深く関係していることがうかがえた。以上から、家庭と学校にほぼ集約される子どもの日常生活におけるさまざまな活動や人間関係、居場所を保障することができれば、子どもが自己肯定感をよりいっそう感じることができ、安心して充実した生活を送ることができるようになることも予想される。

【子ども図 6-3、12-3、13-3、14-3】

## 【2】悩んだり傷ついたりした体験の差

おとなからの傷つき体験について、自己を肯定的に捉えていない子どもは、捉えている子どもに比べて、おとなからのさまざまな傷つき体験を多くしている。特に親からの傷つき体験、先生からの傷つき体験の有無について、大きな差があり、自己を肯定的に捉えている子どもの回答の約 2 倍～3 倍の割合で回答している（「親に心を傷つけられる言葉をいわれる」：自己を肯定的に捉えている子ども 8.5%、肯定的に捉えていない子ども 24.6%、「親から、たたかれる・なぐられる」：自己を肯定的に捉えている子ども 5.3%、肯定的に捉えていない子ども 16.9%、「先生に心を傷つけられる言葉をいわれる」自己を肯定的に捉えている子ども 7.4%、肯定的に捉えていない子ども 15.9%、）。

友だち・先輩等からの傷つき体験についても同様に、自己を肯定的に捉えていない子どもは、自己を肯定的に捉えている子どもに比べて、傷つき体験をより多くしていた。特に「友だちや先輩等から心を傷つけられる言葉を言われる」経験については、自己を肯定的に捉えている子どもの回答の 2 倍以上の回答があった（「友だちや先輩等から心を傷つけられる言葉を言われる」：肯定的に捉えてい

る子ども 20.7%、肯定的に捉えていない子ども 41.5%、「友だちや先輩等から無視される」：肯定的に捉えている子ども 14.4%、肯定的に捉えていない子ども 22.1%）。

自己肯定感の高低と傷つき体験の有無についても、相関関係があると考えられる。

【子ども図9-3、10-3】

### 【3】 悩んだり傷ついたりしたときの対処方法

おとなから何らかの傷つき体験をしたときの対処方法について、自己を肯定的に捉えている子どもは、捉えていない子どもに比べて、「誰か他の人に相談した」とする回答が2倍以上多かった（肯定的に捉えている子ども 42.1%、肯定的に捉えていない子ども 15.8%）。また、「がまんした」とする回答が、両者で最も多い回答であったが、その割合は、自己を肯定的に捉えていない子どもの方が、約20ポイント高かった（肯定的に捉えている子ども 43.9%、肯定的に捉えていない子ども 62.1%）。友だちや先輩等から何らかの傷つき体験をしたときの対処方法については、自己を肯定的に捉えていない子どもは、捉えている子どもに比べて、「がまんした」とする回答が20ポイント以上高かった（肯定的に捉えている子ども 39.7%、肯定的に捉えていない子ども 62.5%）。「誰か他の人に相談した」とする回答は、自己を肯定的に捉えていない子どもについても比較的高い回答があった（肯定的に捉えている子ども 36.5%、肯定的に捉えていない子ども 30.2%）。

自己肯定感の高い子どもの方が、他者に助けを求めながら、積極的に問題の解決をはかれる状況にあることがうかがえる結果であった。また、それが、自己肯定感を保てる要因の一つとなりうることも予想される。

傷つき体験の有無のみならず、もし傷つく体験をしたときに、どのように対処して解決しているのか、といった点についても、子どもの自己肯定感の高低と大きく関係があると考えられる。

【子ども図9-2-3、10-2-3】

自己を肯定的に捉えている子どもと捉えていない子どもとは、日常生活におけるさまざまな活動への取り組み姿勢や悩んだり傷ついたりした体験の有無に違いが見られた。その違いが生じる要因としては、子どもの1日の時間の多くを過ごす学校におけるさまざまな活動がストレスになっていないかどうか、学校以外にも打ちこめるものがあるかどうか、また親や友だちといった、身近にいる他者との良好な関係が築けているか否か、このような点が相互に大きく影響しているように思われる。

子どもの日常生活が安心して充実したものとなりうるためには、子どもが自己肯定感を持てる生活が実現できていることがとても重要である。子どもが安心して充実した日常生活を送れるような地域づくりを実現するためには、子どもが自己肯定感を持てるような環境をいかに整えるか、そのために、子どもが感じる不安やストレスをきちんと受けとめて改善し、積極的にやりたいことに打ちこめる環境を整えることが求められているといえる。

## 3. 子どもとおとなの認識のズレ

子どもが安心して充実した日常生活を送れる環境を整えるためには、前述のような子どもの実態を、おとなが正確に把握しているかが重要であることはいままでもない。しかし、調査結果から、おとなの子どもに対する認識は、子どもの実態とズレがあることがわかった。

例えば、子どもにとってホッとでき安心していられる居場所として、子どもの回答で3番目に高いものに「学校の教室」（子ども 24.5%）があげられているが、「学校の教室」を子どもにとっての居場所と認識するおとなの割合は少ない（4.2%）。その他、子どもが「疲れること、不安に思うこと」として、「友だちや先輩との関係」をあげるおとなは55.4%あったが、子どもの回答は29.6%にとどまった。

（なお、子どもとおとなの認識の差異を見るにあたっては、子どもの自己肯定感、今打ちこんでいる

こと、疲れること、傷つき体験の有無、居場所等について、子どもに尋ねた質問・選択肢と同内容のものを、おとなに対しても尋ね、子どもの回答と比較している。）

さらに、おとなの認識のズレ方を、子ども（0～17歳）の有無別に見てみると、子どもがいるおとなと子どもがいないおとなとは、そのズレ方に特徴があった。

### （１）子どもがいるおとなの子ども認識とそのズレ

第一に、親自身や家族に関する子どもの認識と位置づけにズレが見られた。まず、子どもにとってホッとでき、安心していられる居場所として、子どもがいるおとなは「家族と一緒にくつろぐ場所」を最も多く（78.3%）あげているが、子どもの回答は52.0%にとどまった（子どもの回答で最も多い回答は「自分の部屋」で85.6%）。同様に、子どもが「何でも話せる人」として、子どもがいるおとなは、「親」自身をもっとも多く（82.6%）あげているが、子どもの回答は、58.5%にとどまった（子どもの回答で最も多い回答は「友だち」で73.0%）。子どものいるおとなでは「祖父母」をあげる回答も多かった（28.3%）が、子どもの回答は12.2%であった。

第二に、子どもと教師の関係の認識に、子どもの実際とズレが見られた。子どもが「自分を大切に思ってくれる人」として、「担任の先生」をあげる子どもの回答は25.5%であったが、子どもがいるおとなの回答は16.5%にとどまった。

第三に、友だちとの関わりの認識に、子どもの実際とズレが見られた。子どもが「自分を大切に思ってくれる人」として「友だち」をあげる子どもの回答は67.2%と高かったが、子どもがいるおとなの回答は39.1%にとどまった。

子どもがいるおとなは、親や親戚などの身近な人に関する子どもの認識を、子どもの実際よりも高く捉える傾向にあった。逆に、教師や子ども同士の関係に関しては、子どもの実際の認識よりも低く捉える傾向にあった。

【おとな図10-2、11-2、12-2、子ども図12-1、13-1、14-1】

### （２）子どもがいないおとなの子ども認識とそのズレ

第一に、子どもと教師の関係の認識に、子どもの実際とズレが見られた。子どもが「自分を大切に思ってくれる人」として、「担任の先生」をあげる子どもの回答は25.5%であったが、子どもがいないおとなの回答は9.5%で、子どもがいるおとなよりもさらに子どもとのズレが大きかった。子どもがいないおとなも、教師に関しては、子どもの認識よりも低く捉える傾向にあった。

第二に、おとなからの傷つき体験の有無の認識にも子どもの実際とズレが見られた。選択肢すべてについて、子どもの実際の回答よりも高い回答で、子どもがいるおとなよりもズレが大きかった。

第三に、友だちとの関わりについての認識の面で、子どもの実際とズレが見られるところがあった。子どもが「疲れること、不安に思うこと」として、「友だちや先輩等との関係」をあげる回答が、子どものいないおとなで55.3%あったが、子どもの回答は29.6%であった。また、子どもが「自分を大切に思ってくれる人」として「友だち」をあげる子どもの回答は67.2%と高かったが、子どもがいないおとなの回答は38.7%にとどまった。

第四に、友だちからの傷つき体験の有無の認識にも子どもの実際とズレが見られた。おとなからの傷つき体験の有無に関する認識結果と同様に、選択肢すべてについて、子どもの回答よりも高い回答で、子どもがいるおとなよりもズレが大きかった。

子どもがいないおとなは、子どもがおとなとの関係、子ども同士の関係の中で、子どもがストレスを感じ、傷つき体験など多くの問題を抱えていると捉える傾向が、子どもの実際よりも高く見られた。

【おとな図7-2、8-2、9-2、12-2、子ども図8-1、9-1、10-1、14-1】

おとなが子どもの実態を把握・理解しようとしたとき、子どもがいるおとなもいないおとなも、実際の子どもの姿とズレた認識を持つ可能性があることがうかがえた。子どもに関わる施策の推進や制度の整備をする際には、子どもの有無に関わらず、おとなは子どもの実態とズレた認識を持ちうるこ

とを謙虚に受け止め、ズレを修正するためにも、子どもの思いや意見に丁寧に向き合って受け止めることが必要になってくる。

#### **4. 子どもを取り巻くおとなの実態**

おとな自身が「疲れること、不安に思うこと」としては、「自分の体調」(37.7%)や「自分の仕事」(31.0%)といった自分に関わることが上位を占めた。続いて、「子どもの進路・将来」(24.5%)「子どものしつけ」(17.4%)「子どもの友人関係」(13.4%)「子どものいじめ」(12.1%)「子どもとのコミュニケーション」(10.8%)といった子どもに関わること、「家計」(25.8%)といった家庭に関わることなど、多岐にわたる回答があげられた。

これらの項目は、とりわけ、子どものいるおとな、また自己肯定感の低いおとなが多くあげる傾向にあった。

【おとな図14-1、14-2、14-3】

おとなは、子どもの安心で充実した日常生活を保障するためのさまざまな条件を整備していく役割を持つ。しかしながら、それ以前におとな自身もまた多くの問題を抱えていることが、今回の調査で明らかになった。子どもの安心で充実した生活を保障するための地域づくりを進めていくためには、子どもを取り巻くおとなに対する支援も合わせて考慮される必要がある。

#### **5. 子どもの権利条約に対する認知度**

子どもの権利条約の内容を知っているかどうかについては、「知っている」と回答した子どもが39.8%、おとなが16.1%という結果であった。知った方法としては、子どもの場合、「学校の授業」が71.7%と最も多く、おとなの場合は、「テレビ、ラジオ」53.5%、「新聞」51.0%が多かった。

子どもが子どもの権利条約を認知するきっかけとしては、学校教育が他の方法に比べて大きいことがうかがえる。

【子ども図16、16-1、おとな図17、17-1】

#### **6. 札幌市の子ども相談・救済制度の認知度と制度への期待**

子どもが何らかの傷つき体験をしたり、不安やストレスを感じたりするときに、いかに速やかに不安やストレスを受けとめ解消に向けた取り組みができる環境が整っているかが、自己肯定感を高め、安心で充実した生活を実現するためには重要である。

札幌市には、子どもの安心・安全を確保するために、さまざまな相談・救済・支援を行う制度が設けられている。その中で、これらの制度が、いかに子どもやおとなに認知され、子どもが何らかの傷つき体験をしたり、不安やストレスを感じたりするときに、速やかに不安やストレスを受けとめ解消に向けた取り組みを遂行できるのかを、常に利用する子どもやおとなの視点にたって、見直していくことが求められる。

##### **【1】相談機関・救済制度の認知度・利用状況**

子どもの半数以上が認知していた制度は、「いじめ電話相談（札幌市）」(54.5%)、「チャイルドラインさっぽろ」(52.2%)であった。この数値は非常に高いといえる。そのほか、「児童相談所（札幌市）」(33.2%)「札幌市子どもアシストセンター（札幌市）」(24.8%)についても認知度が比較的高



かった。

おとなの場合、最も認知されていた制度は、「児童相談所（札幌市）」（65.4%）で、「いじめ電話相談（札幌市）」（55.1%）「子どもの人権 110 番（国）」（46.3%）「札幌市教育センター教育相談室（札幌市）」（22.6%）と続く。

これらの相談機関・救済制度を利用した経験のない子どもが 95.6%、おとなが 90.4%と 90%を超えた。その理由としては、「相談窓口相談する必要がない」（子ども 82.4%、おとな 87.9%）とする回答が圧倒的に多かった。また、制度の存在を知っており、相談することがあるにもかかわらず利用しない理由として、子ども、おとなともに「相談してもよくなると思わないから」（子ども 13.4%、おとな 4.6%）を最も多くあげており、相談機関・救済制度の実効性に十分な信頼を寄せていないことがうかがえた。この点については、問題の改善とさらなる実効性・質の向上を目指す必要があると同時に、相談機関・救済制度の実際について広報を強化していくことも重要であろう。

【子ども図 17、17-1、17-2、おとな図 18、18-1、18-2】

## 【2】相談機関・救済制度への期待

このような実態であるにもかかわらず、子どももおとなも、相談機関や救済制度の必要性については実感している。希望する相談機関・救済制度として、子ども、おとなともに高かった回答は、「どんな話でも聞いて、真剣に受け止めてくれること」（子ども 94.1%、おとな 87.2%）であった。次いで、「解決方法を教えてくれること」（子ども 82.1%、おとな 77.8%）「困ったときに（子どもが）相談窓口へ逃げ込めること」（子ども 58.9%、おとな 74.6%）であった。その他、子どもの回答では「年齢の近い話し相手がいること」（56.1%）、おとなの回答では「解決に取り組んでくれないところや人に働きかけてくれること」（70.7%）が多かった。

既存の相談機関・救済制度を利用したことのない子どもやおとなが大多数であるが、相談機関・救済制度そのものが不必要とは思っておらず、相談機関・救済制度のあり方に対する希望や期待があることがうかがえる。子どもやおとなにとって利用しやすい相談機関・救済制度が、このような子どもやおとなの要望をふまえて今後さらに検討・整備されれば、さまざまな問題を抱える子どもやおとなのためにその役割を果たすことができよう。

【子ども図 18、おとな図 19】

## おわりにかえて

今回の調査の結果から、子どもの安心は、その子どもの自己肯定感と密接に関係していることがわかる。おとなから見て安心とみなしうる環境は、それだけで子どもの安心を支えるものとはいえない。むしろ、社会的な関係や環境が子どもの自己肯定感を高めることにつながることによって、子どもの安心は確保できるものと考えられる。だからこそ、子どもの自己肯定感を豊かにすることのできる社会的な関係や環境が必要なものであり、家庭や学校や地域社会には、そのような機能の発揮が求められている。その意味で、親・家庭がダメ、教師・学校がダメ、地域社会がダメ、しっかりしなさいというような発想ではなく、国連・子どもの権利条約の実現をめざすユニセフの「子どもにやさしいまち」という視点や内容をふまえて、「まちづくり」のなかで家庭や学校や地域社会を再構築していく必要がある。

特に子どもにとって学校は、勉強や友だち・教師との関係の問題など、疲れや不安を感じる場でもあるが、一方で、悩みを聞いてくれる友だちに癒されたり、クラブ活動・部活動や勉強などにやりがいを感じたりする場でもある。また、教師からの傷つき体験があるなど、教師との関係に悩む場合もあれば、信頼できる教師に話を聞いてもらって安心できる場合もある。子どもが安心して充実した生活を送れる学校をつくるためには、傷つき体験を持つ子どもが速やかに救済・回復されるべきであることはいうまでもない。そのみならず、傷つき体験は特になくても、日々の生活に疲れている子

も、自己肯定感を持たず、やりがいを感じることもなく日々生活することを余儀なくされている子どももまた、相談・救済の取り組みにおいて課題とされるべきである。加えて、傷ついているSOSを出せない(出さない)子どもが一人ででも安心してSOSを出せ、効果的に救済されるようにすることも緊急の課題になっている。

このような子どもの相談・救済をめぐる状況の中で、本調査の結果にも表れているような子どもの現実に即し、子どもが安心して利用できる相談・救済制度の整備が求められている。

この相談・救済制度の設置にあたっては、本調査の結果で明らかになったように子どもの実態とおとなの子ども認識にはズレがあることをふまえ、相談・救済制度のあり方や内容に子どもの意見を反映していくことが求められる。また、相談・救済の取り組みにおいても、子どもを救済の客体・対象にするのではなく、解決の主体として位置づけて子どもの救済・回復に努めることが肝要である。このような相談・救済制度は、子どもの権利侵害の現実やその対応の現状からして子ども固有のものにすることも大事である。そうすることが既存の救済制度や活動との連携をいっそう効果的なものにしていくであろう。

そして、子どもの相談・救済とともに、子どもの意見表明・参加の促進、子どもの居場所づくり、子どもの権利意識の向上など、総合的な制度の構築や取り組みが期待される。そのことが相談・救済制度の充実にもつながり、札幌市の子どもたちが安心して生活し成長していくことになるであろう。